



今に残る 「授産場跡」碑

西区のメインストリート琴似栄町通に面し、春や秋のお祭り、初詣など、地元の人々でにぎわう「琴似神社」。この神社の境内には「琴似屯田授産場跡」と刻まれた石碑を見つけることができます。

琴似一条七丁目にあるこの神社が、現在の場所に移ったのは大正四年。それ以前の琴似屯田兵が入地した明治八年には、兵村部有財産地として開拓使によって管理されていました。その後、屯田兵たちの訓練の場として使用されていましたが、この練兵場が山の手に移った後の明治九年、当時開拓使が奨励した養蚕のための桑畑と養蚕室が建てられました。



▲琴似神社

屯田兵の 第一の産業

「養蚕」。この産業は、日々、木を切り倒し、畑を耕して開拓に明け暮れる屯田兵にとって「第一の産業」と考えられるようになっていきます。

もともと、屯田兵制度の導入には、明治維新以後、社会問題にもなっていた困窮士族の授産事業としての側面もありました。そのため、初めての屯田兵であった琴似屯田兵村では、開拓のほか、さまざまな産業の導入が試されます。その中で「養蚕」は、開拓使によって奨励されます。

琴似町史の作物史に以下の記述があります。「札幌地方の養蚕の始まりは、明治三年開拓使河辺盈徳という人が、仙台から蚕種若干を求めて来て、野桑で養ってみたところ、予想以上に好成績で一石八斗の繭を得たので、開拓使では急に産業奨励に乗り気になり、翌四年二月に札幌郡各村役人に諭達を發した^{※1}。こうして「養蚕」は琴似や山鼻な



▲石狩郡篠津村蚕室（北海道大学附属図書館蔵）

▼札幌養蚕室（北海道大学附属図書館蔵）



- ※1 失業者又は困窮者に、仕事を与え、生計を助けること。
- ※2 官府から触れさとすこと。

資料からひもとく

どの屯田兵村で取り入れられたようです。そして明治九年、琴似屯田兵村に、養蚕室が建ち、さらに後年には、屯田兵の中には割り当てられた百五十坪の兵屋に自前の養蚕室を持つ者まで現れました。

この当時の「養蚕」に関する記述は、琴似兵村誌や琴似屯田百年史、琴似町史などさまざまな文献で見ることができます。

しかし、琴似屯田兵村に存在した養蚕室を今に伝える写真は現在発見されて

いません。この養蚕室がどのような建物だったのか。当時、同時期に建てられた「石狩郡篠津村蚕室」と明治八年に北一条西八丁目付近に設置された「札幌養蚕室」の写真が残っています（北海道大学附属図書館蔵）。これらの写真から当時の養蚕室は、二階建てで室内の温度の調整と換気のために屋根には外界の空気を取り入れる空気口があったことが分かります。建物の内部については、現在北海道開拓の村にある「旧田村家北誠館蚕種製造所」から蚕室のほか、貯桑庫があったと予想されます。

さらに開拓の村には、